

或は大英博物館に、或は露國のアレキサンダー三世博物館に、或は我が二樂莊に世界各處に保管せられて、専門學者はその調査にいそしみつゝある。しかしその多くは未整理のまゝであつて、未だ一般學者の研究に利用せられる程度に立ち至つて居らぬ。英國の Sem 博士發掘のものが佛國の故 Chavannes 博士によりて Documents Chinois decouvert par Amel Steh の題せられてその一部が公刊せられた時、吾人は如何にその眼福を喜んだことであらう。羅振玉氏の流沙餘簡も亦此書を翻刻した。大谷伯爵のものは曩に西域考古圖譜二卷になつて大槓が寫眞せられたが、その中の古文書の解讀説明は實に羽田博士の苦心と努力によりて彼の二樂叢書となり既にたしか第五冊まで活字に附せられた。然るに羽田博士が親しく巴里のビブリオテーク・ナショナルに於て鑑撰しベリオ博士の諒解を得て兩博士の共編の下に燉煌遺書の出版せらるるにこゝになつたのは實に世界學界の一大慶事であつて、ベリオ博士の雅量と好意と羽田博士の功績と又本書の出版の如き非營利的事業に對し學を愛するの志より

上海の財團法人東亞攷究會の爲したる後援は永へに記憶せらるべきである。本書はその第一集であつて大版影印玻璃版本一冊と、菊版活字本一冊とより成る。玻璃版本に收むる所は慧超往五天竺國傳殘卷、釋迦牟尼如來像法滅盡之記一卷、七曜曆日一卷、漢審對音千字文殘卷の四種で各篇何れも羽田博士の解説がついて居る。活字本の方は後漢乾祐二年沙州地志殘卷張氏勳德記殘卷、後唐長興四年五年曹議金疏後、晋天福七年曹元深疏、陰善雄羅盈達閩海員張懷慶銘讚、常樂副史田員宗啓、燉煌名族志殘卷、小説明妃傳殘卷、法成譯薩婆多宗五事論の九種を收め、これ亦各々羽田博士の解説がある。玻璃版は以て原書の面影を偲ふべく活字本は以て解讀利用の便が多い。二樂叢書と謂ひ本書と謂ひ共に羽田博士の勞を感謝せなければならぬ。(一部大小二冊、價一〇・〇〇圓、上海靶子路東亞攷究會發行、京都弘文堂賣捌)〔以上那波〕

● Hermann Oncken; Die Rheinpolitik Kaiser Napoleons III. von 1863 bis 1870 und der Ursprung der Krieges von 1870—1871.

(Stuttgart, 1926)

本書は、西洋史文献に於る、新しき一個の重要著述にすぎべきである。一八七〇年の普佛戦役に先立つ國際外交の研究に關しては、已に、佛國外務省の手によりて膨大な『Les Origines Diplomatiques de la Guerre de 1870—1871』の刊行があつて、その價値の極めて大なるものなるべきは明かであるが、残念ながら未だその完成を見ないのである。しかも今や、獨逸側より本書の出現を見るに至つたのは大いに吾人の興味を惹く所である。本書が極めて豊富にして且重要な根本史料に基けることは本書の學的價値を大いに高める所以である。

併し著者の主張そのものには、尙ほ且論難の餘地が存して居ると思はれる。それは、つまり、ナポレオン三世が決して、從來信ぜられて居たやうな、諸國の國民主義を擁護せんことを公平なる國際的理想主義者ではなくて、純然たる佛國家の利益本位主義の政策を行つた者であるに云ふ點にある。即ち、皇帝は、ランドンランド、より出来る限りの土地を奪取して獨逸の勢力を削り、以て大陸

に於る佛國の覇權を確保せんとした。この彼の侵略的、背信的なる對外政策こそ、一八七〇年の戦役の眞因でもあり、その後の歐州國際關係の暗礁となつた獨佛の反目と云ふこの原因でもあると著者は主張して居るのだ。かゝる著者の主張には、そこに國民的偏見の頗る強く働いて居るのを認めなければならぬ。このことは、ナポレオンの政策が、その末期を除いては常に公平なるものであつたと云ふ佛國の歴史家の主張に於ても同様である。かゝることは、一個の國際關係の歴史研究に於て、それが當事者たる國民から出た場合には、常に現はれて來る現象である。かゝる國民的偏見を排除して、眞實の原理の確立に資せんことを、これが日本に於る西洋史研究の重要な意義を有する所以の一つではあるまいか。

要するに本書は、その史料の選擇、論議の方法に於て甚はだ傾向的なる短所を有して居ることは云へ、佛國外務省の出版と相並んで、普佛戦役前史の研究の重要な著述とすべきである。

●Gustave Glotz, avec la Collaboration de Robert Cohen. Histoire ancienne; 2^e partie: Histoire grecque, tome I: Des origines aux guerres médiques, fasc. I. (Paris, 1925)

本書は、前回に紹介したグロッツ教授監修の Histoire générale の中の、古代史第二部ギリシヤ史(三巻より成る)の第一巻第一分冊(四分冊より成る)である。本書の出現は、多數の古代史研究著述の中に、一個の權威的著述を加へたものと見ることが出来る。グロッツ教授は、その豊富なる學問的、藝術的智識によつて、本書をして、政治文明の完全なる綜合的作物たらしめたのである。第一章は、ギリシヤ及びその他地中海沿岸世界の地理的状況を述べ、第二章はクリート文明を取扱つて居るが、教授には已に La civilisation égéenne (1923) の著あれば、こゝには略述されて居る。第三章は、アハイアン、ドリアンの移住時代並びにギリシヤ民族の小アジア移住を取扱ひ、第四章はホーマー時代を取扱ひ、教授はこの章に於て、古き昔よりのギリシヤ民族の社會生活の繼續的發展

展を極めて優れた筆をもつて描いて居る。本書は、これを最近のケンブリッジ古代史のギリシヤ史と比較すればそれに缺けて居つた統一性を充分に保有して居る事が分る。Histoire générale 全體の完成の一日も速かならん事を、吾人は切に希望する次第である。

●Camille Bloch; Bibliographie méthodique de l'histoire économique et sociale de la France pendant la Guerre. (Paris, 1926)

本書は、カーネギー基金によつて J. T. Shotwell 氏監修の下に組織されて居る「大戦中に於る經濟的社會的歴史」の一部をなすものである。著者は現在、Bibliothèque—Musée de la Guerre の監修者として、欧州大戦中に於る佛國の國情に就いて深き智識を有する人である。本書は、大戦の始より一九二〇年末に至る迄の、一萬六千二百餘の論文を集め、これを極めて公平なる立場より立法、産業、財政、社會生活その他種々の部類に分ち、大戦中の佛蘭西に關して如何なる論文が出でしかを一目瞭然たらしめて居る。將來、この方面の研究には、先づ

第一に本書の手引を必要とするであらう。

● G. R. Galbraith: *The Constitution of the Dominican Order*, 1216—1360. (London, 1925)

ドミニコ教團の制度の研究は、中世文化史上に於て重要ななるもの、一つであるが、従來この方面には良著の數きを憾みこした吾人は、今本書を得たことを大なる喜びとする。著者は本書に於て、聖ドミニコによつて作られし *Constitutions* の思想は、全然獨創的なるものとはなし難く、それ以前の僧團殊に十二世紀の始、佛蘭西の *Priemonte* に *Nobert* の開いた僧團の思想に影響される所大なりしこと、この *Constitutions* は十三世紀の半ばまで徐々たる發展進化を示して居るが、しかもオートクラチックな思想は少しも現はれて來なかつたこと、の二點を力説して居る。要するに本書は、その内容に多少の誤謬があることは云へ、ドミニコ教團の研究の好参考書たるを失はず、しかも附録として、十四世紀の *Constitutions* の原文を掲載して居ることは本書の價值を一層に大なら

しめるものである。

● A. A. W. Ramsay: *Idealism and Foreign Policy: A Study of the Relations of Great Britain with Germany and France, 1860—1878*. (London, 1925)

本書の主要なる内容は、一八六三年より六八年に互る英國の對外政策の研究であつて、著者はこれを、英國外務省の *Record Office* の公文書によつて研究したのである。この時代は、國際外交の複雑せる時代であつて、しかも英國の外交甚はだ退嬰的であつて、後世より、その國際的威信を損するところ少なくなかつたを非難される時代である。されば著者が、*Russel*, *Clarendon* などの外相その他の外交官に對して非難の意を有して居るのは自然の事である。著者が、*シユレスウイツヒ*、*ホルスタイン* 問題に於てスカンジナビヤ諸國の北海制海權に對する配慮よりして英國の外交策が大いに影響を受けたと論じて居るのは興味深いことである。六三年——六八年の時代以外の本書の内容は、同一の *Record Office* の史料に

よつて作られたものでない故、その學術的價値は少い。
ついで角本書は Webster: The Foreign Policy of Castle-
reign. Temperley: Canning's Foreign Policy. Morley:
Life of Gladstone. Buckle: Life of Disraeli. G. Cecil:
Life of Robert Marquis Salisbury. Ward and Gooch:
Cambridge History of British Foreign Policy. に相並ん
で、英國對外政策研究の好參考書たるを失はない。

●Joseph Kuischer; Russische Wirtschaftsges-
chichte. Band I. (Jena, 1925)

露國史、殊にその經濟史の研究書は甚だ僅少であるが
今や經濟史研究に豊富なる學識を有するクーリツシエ
博士の本著を得たるは誠に喜ばしきことである。著者は
露國の經濟的發展が西歐のそれに比して甚だ遅々たるも
のなりとして居る。中世にては村落經濟の時代であつ
て、封建制度は西歐のそれの如くに發展せず、土地の大
部分は大地主の手に占有され、對外貿易は殆んどハンザ
同盟都市の獨占する所であつた。シベリア經略によつて
植民發展時代が開始されたが、しかも十六世紀の後半に

は農奴制度が固定し、露國の經濟生活はかえつて退化の
趣を示し、十七世紀に於ても尙ほ未だ資本主義を知らな
かつたとして居る。本書には優秀なるビブリオグラヒー
を附して居る。吾人は本書の完成の速かならんことを祈
る。〔以上大村〕